



「有益な有機化学製品を 生み出す」ために一 己が使命は揺るがない

鎮目 達雄 (1911~1998年)



■大阪有機化学工業 株式会社

本社所在地：大阪市中央区安土町1-7-20 従業員数：365名 資本金：36億29万円
創業：1941(昭和16)年12月8日
事業内容：有機化学工業品・有機試薬品・医薬業中間体・石油化学製品・特殊ポリマーの製造販売、溶剤類の精製加工

「創意工夫の研究者」の誕生

1911(明治44)年、鎮目達雄は商いを営む家庭の長男として横浜に生まれた。12歳の時に父を亡くすも、母の理解もあって高校卒業後は早稲田大学 理工学部応用化学科に進学し、そこで化学のおもしろさに目覚めることとなる。大学卒業後はそれまでの自身の研究を活かすため、日本樟脳(株)に入社した。「樟脳」とはクスノキの根や枝から得る結晶で、医薬品・香料・殺虫剤・防臭剤などに利用されており、入社した達雄はその新たな合成法に関する研究を命ぜられた。しかしながら、上司から指定された方法を軸とした採取法では生産性に限界があることを見抜いた達雄は、それよりも遥かに効率的な方法を創意工夫によって開発していった。しかし、大学を出たての研究者の言うことは会社や上司から相手にされず、達雄の胸には「自分の開発した技術を使ってみたい」という思いだけが積み重なっていった。



林産化学工業(株)の煙突
(和歌山県橋本市入郷)

当時、達雄は廃棄物として放棄されていた櫓から、加圧水蒸気蒸留法によって精油を製造していた。



化学実験に取り組む
若き日の鎮目達雄

日本樟脳(株)時代から、常に創意工夫を凝らして仕事を進めるなど、際立つ存在として一目おかれていた。

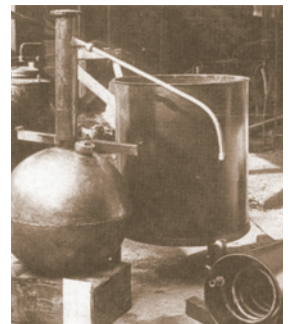
創業までの軌跡と太平洋戦争開幕

そんな思いに突き動かされるように、達雄は1939(昭和14)年に日本樟脳を退職し、和歌山県で友人らと林産化学工業(株)を立ち上げ、加圧水蒸気蒸留法による精油の製造を開始した。意見の相違から1年半ほどで同社も退職したが、「独自の事業で身を立てる」という自信と情熱はより強固なものとなり、独立開業への基盤が作られた。

その後、大学時代の知り合いである陸軍将校よりレンズ接着剤の研究開発を依頼された達雄は、その翌年に合成法を確立し軍へ試作品を提出した。試作品を提出してから2か月後、達雄は霞が関の特許庁から呼び出され、帝国陸海軍指定の軍需工場を設立・操業を開始するよう命ぜられた。その晩、突然のことに呆気にとられながらも大阪へ戻ろうとする達雄の耳に、ラジオから「本日未明、真珠湾を攻撃した」というニュースが入ってきた。こうして1941(昭和16)年12月8日、奇しくも太平洋戦争が開戦した日、大阪有機化学工業(株)の前身である大阪有機化学工業所が大阪市大正区に設立されることとなった。



光学レンズ用接着剤「カナダバルサム」(写真左)と
当時の蒸留缶(写真右)



バルサムは針葉樹類から分泌される樹脂と揮発性油の混合物で、屈折率がガラスに近いため、光学レンズやプレパラートの封鎖に用いられた。達雄はこの発明により帝国発明協会有功賞を受賞している。

ささやかながら熱気に満ちた船出

大阪有機化学工業所は、まず光学レンズの接合や顕微鏡のプレパラート封鎖に使用される接着剤を製造した。開戦に伴い、それまで輸入品に頼ってきた光学機器を国産化しようという軍部の意向から、それに欠かせない質のいい接着剤を開発した達雄に所長として白羽の矢が立ったのだった。

設立当初は従業員数9名、工場の広さわずか10坪という家内工業であったが、ついに自らの技術を発揮できる場所を得た達雄を筆頭に、事業に対する志は高く、作業場は常に活気に満ちていた。その後、順調に生産を開始した工業所は、油浸用の合成ツェーデル油の開発にも成功し、ますますその価値を高め、創業から3年後には900㎡を有する工場を建設するにいたった。

平和な時代での活路を探す 会社を救った「人造バター」

1945(昭和20)年、終戦を迎えた日本では、これまで軍需に頼ってきた企業が大きな方針転換を求められていた。大阪有機化学工業所も御多分に漏れず、「平和な社会を築いていく」という国の新たな目標の下、自社に何ができるかを問い直す必要に迫られていた。達雄は終戦の日、悲痛な面持ちの従業員たちを前に、「当社は平和産業の担い手として生産を継続します。有機試薬は産業の復興に欠かせない商品であることから、まず国内の需要を満たし、やがては海外輸出を展開します」と事業構想を語り奮起を促した。

しかし、終戦からしばらくは有機試薬を主軸に経営を行ったものの、あらゆる物資が不足していたことから安定生産できず、経営は薄氷の上を歩くような状態であった。この危機を乗り切るため、同社は進駐軍からの情報などを収集し、日用品の製造に乗り出している。品目は、石鹸、人造バター(マーガリン)、サッカリン(人工甘味料)、化粧クリーム、床・車用ワックスなど多岐にわたる。その中でも、特にマーガリンについては受注が相次ぎ、最盛期には売上の35%超を占めるなど、同社の経営を支える柱の一つにまで成長していた。

目先の利益を顧みず貫いた信念

日用品の製造で経営を立て直す一方で、達雄はすでに「戦後の先」のことを念頭においた経営を進めていた。

終戦の翌年、工業所を現在の「大阪有機化学工業株式会社」へ改組し事業基盤の強化を図ると、少しずつ工場の整備を行って試薬の取り扱い品種を増やしたほか、試薬の需要が集中する東京へ出張所を開設し販路の拡大を推し進めた。達雄は、マーガリンの爆発的なヒットや、そこで得られた突発的な利益に自分の信念を揺るがすことなく、「有益なる有機化学製品を生み出す」という会社の本質たる目的に向かって目を背けることなく邁進し続けたのである。

昭和20年代も終盤になり、会社が有機試薬で十分に経営していける道筋が見えると、達雄はそれまで売上の3分の1以上を占めていたマーガリンやその他日用品の製造を縮小・中止し、会社を有機化学製品の製造・開発に集中させた。

時は折しも、「石炭から石油へ」というエネルギー革命の黎明期にあり、その流れの中で、同社は有機試薬をベースとした合成技術、精製蒸留技術を活かして、徐々に工業薬品分野へシフトしていった。



戦後の経営を支えた「人造バター」
手前右の箱にうっすらと「人造バター」の表記と同社のロゴマークが見える



事業拡大にともない建設された柏原工場(現大阪事業所)

一丸となった組織の強さ

日 用品等の製造を中止したことによって、「有益なる有機化学製品を生み出す」という組織の目的が明確となった大阪有機化学工業(株)は、ここから破竹の勢いで成長を遂げていく。

飛躍の第一のきっかけは、塗料溶剤として使われる酢酸エステル類の開発だった。好評を得た製品を軸に、次々と新製品を発表していくこととなり生産量は増大。それに伴い製造技術のノウハウも蓄積され、工業的な規模での生産体制の確立が図られた。また、日本で初めて「アクリル酸」の国産化に成功したことも同社の評価を大きく高めることとなる。ビニールやプラスチックの黎明期である昭和20年代こそ需要は少なかったものの、徐々に販路を開拓するとともに売上は加速度的に伸びていった。現在、アクリル酸関連事業は同社の経営の柱となっている。

第二の飛躍は、受託加工事業の拡大にあった。1956(昭和31)年、当時すでに高レベルな蒸留精製技術を有していた同社は、東洋レーヨン(株)(現・東レ(株))からフェノールの蒸留精製を委託されたことをきっかけに受託精製をスタートさせた。以降、工業薬品業界が石油化学に舵を切り、大量の石油化学製品が輸入されると、その汚染除去の需要が増大していき同社の受託量も年々増加していった。

この頃、もともと30名程度であった同社の従業員数は3倍近く増え100名を超えた。同時に、1955(昭和30)年には、それまでの4倍の広さを誇る工場を大阪市城東区関目に建設。しかしそれでも増え続ける生産量を支えきれず、1961(昭和36)年にはさらに4倍の敷地面積を持つ柏原工場を建設した。

人間性を伸ばす教育体制

達 雄は昭和40年代に入ると、優秀な人材の獲得に力を注いだ。それは、新製品の開発や業容拡大には、常に時代の先を見据えるセンスと最先端の知識を持った人間の力の結集が必要だと確信していたからだった。加えて、入社後の教育体制についても、社内講師による実務研修やOJT制度、関連工場への見学会などを早期から導入しており、現在に至るまで充実した内容を提供し続けている。

また、全社一大家族という考えのもと、戦後22年という早い時期から、春は日帰り、秋は一泊の慰安

旅行を行っており、働きやすい職場環境づくりを促している。同社70周年誌に掲載された従業員の方のコメントからは、同社の家族的な居心地の良さ、そして自分の子供に対するような慈愛に満ちた厳しさが、今なお会社に息づいていることが読み取れる。

従業員と分かち合った受賞の喜び

達 雄は1971(昭和46)年に藍綬褒章を、1981(昭和56)年に勲五等双光旭日章を受章した。いずれも日本の産業発展への貢献を認められてのことだった。「この荣誉は私個人のものではなく、大阪有機化学工業が今日まで永く社会に貢献した結果であると思います。献身的な努力を惜しまなかった従業員のみならず、分かちあうものだと思っています」との喜びの言葉で、生涯最高の感激の時を語った。この翌年、達雄は代表取締役社長を辞し、会長に就任した。1941(昭和16)年12月、若干30歳にして大阪有機化学工業所の所長に就任して以降、40年以上にわたって会社を牽引してきた稀代の経営者は、ここに一つの節目を迎えることとなった。

「会社は永遠に続く」

1 996(平成8)年、同社の創立50周年記念式典において、達雄は従業員に対して激励を贈っている。「会社は永遠に続きます。(中略)皆さんのアイデアの一つ一つの積み重ねこそが大切だと考えます。そのためには、一人ひとりが新世代の創業者の気概で頑張るべきです。」

創業者の心は、その分身たる会社を器として従業員一人ひとりの心に溶け込み、続く未来へと受け継がれていく。



様々な産業分野で使用されている同社の製品